

弘治司馬印全集

第十一卷



谷崎潤一郎全集 第十一卷

定價一三〇〇圓

昭和四十二年九月二十五日初版發行
昭和四十八年八月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高梨 茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

白日夢

一

日本に於けるクリップン事件

元

ドリス

四

顯現

七

黑白

一三

續蘿洞先生

三七

卍 (まんじ)

三九

白日夢

一幕

大正十五年九月號「中央公論」

人物

齒科ドクトル

看護婦 A

看護婦 B

六七歳の男の兒

その祖母らしい婦人

老紳士

會社員風の男

丁稚

令嬢

青年

患者 甲

患者 乙

患者 丙

その他納涼客（此の中にドクトルの夫人と子供、令嬢の兩親が交る）、通行人、刑事等

齒の療治を受けに来る人々

時 所

夏の都會らしい感じ

第一場

或るビルディングの六階にある齒科醫院。上手三分の二が治療室、下手三分の一が待合室。ドアA、B。Aドアは上手側面の前方、即ち治療室の壁に、Bドアは待合室の下手側面にある。Aは普通の板のドアで、締まつてゐるが、Bの方は、短い簀の子の彈ね戸にしてある。彈ね戸の向うに外の部屋が薄暗く見える。二室の境目には全然戸がなく、待合室から治療室の様子がすつかり窺はれる。後方に窓三つ。その二つは治療室に、一つは待合室にあつて、そこから眞晝の灼けつくやうな都會の展望——無數の煙突、瓦屋根、ラデオのアンテナ、突兀たるコンクリートの建物などが炎天の下にキラ／＼してゐる。

治療室の設備は極めてハイカラで、アツプ・トウ・デイトである。中央程よき所に手術臺A、B。Aはやゝ上手に、Bはやゝ下手に、觀客席の方に面して据ゑられてゐる。その他エンヂン、コントローラー、消毒裝置、ウオツシング・スタンド、大小さまざまのキャビネット等、ガラスや金屬性の器物が白壁に映じてピカ／＼と光る。上手Aドアに近く、倚り懸りのない長椅子一脚。下手前方待合室との境の所に受付係りのデスクと椅子。長椅子の傍と、後方の壁と、受付係りの席のあたりに、間斷なく廻轉してゐる煽風器三臺。

待合室は中央にテーブル。その兩側に椅子三四脚、正面と下手側面に長椅子。下手の壁に帽子掛けの臺。それにバナマ帽一個、麥藁帽三個、ステツキ一本、地味なバラソル一本。テーブルには新聞や週刊雜誌が載つてゐる。此處にも煽風器が一臺、下手後方の隅に置かれた小卓の上で廻轉を續ける。

A手術臺に六七歳の男の兒、その後ろに付き添ひの祖母らしい婦人が立つてゐる。

ドクトル

B手術臺に和服の老紳士、——紗の羽織に白上布、白足袋、——ドクトルの手術を受けてゐる。

ドクトルは三十五六歳、色の白い、背の高い、髪の毛の濃い、面長の男。仕事着の下にスツキリとしたリンネルのパンツを見せ、白の靴下に黒の短靴。エンヂンを廻して、ドリルで老紳士の下顎の白歯を擦つてゐる。ドクトルの顔は無表情で、終始醫者の冷靜の態度を保つ。

A手術臺の男の兄は自分の番を待つてゐる間、神經質な、怯えたやうな眼つきをしてゐる。時々訴へるやうに祖母の顔を覗き込み、B手術臺の治療の様子を恐ろしさうに偷み視る。

看護婦A、B。Aは上手後方に立ち、乳鉢でアマルガムを擦る。Bは受付のデスクの傍に腰かける。二人とも美人ではないが、二十歳前後の、クリ／＼とした圓顔の女。趣味や感じがよく似てゐるので、一見した時、此のドクトルは斯う云ふタイプが好きなのか知らん、と、そんな気持ち起させる。顔にはお白粉氣が微塵もなく、看護服は着てゐるが帽子は被つてゐない。緒ツちやけた髪を引つ詰めに結び、袖を肘までたくし上げて肉感的な腕を露はし、短い裾の下に逞ましい脛と、太い素足を出し、スリツバアを穿いてゐる。その粘土色の皮膚が純白の服と對照されて蠱惑的に見え、黒人の奴隷女を連想させる。此の二人もドクトルと同じく無愛想で、顔面筋肉は少しも動かない。全く機械的に、人形のやうに立ち働く。

待合室には會社員風の男と丁稚が待つてゐる。會社員風の男は三十四五歳、アルバカの上衣に白セルのパンツ、向つて左側の椅子に腰かけ、卓上の新聞を読む。丁稚は十五六歳のニキビだらけの少年、右の頬ツべたが夥しく服れ、顔が醜く歪んでゐる。正面窓際の椅子に靠れて、脹れた所を氣にしながら、そうツと手をあてゝおさへてゐる。

暫くの間舞臺無言。煽風器の音とエンヂンの響きのみジ／＼と聞える。……

ドクトル、コントローラーを蹴り、エンヂンを止める。

一つ含嗽^{うがひ}をして。

老紳士起き上つて含嗽をする。

ドクトル、最初にアルコールを含ませた脱脂綿を、その後から乾いた脱脂綿を、二つ三つ老紳士の口に咬へさせる。

手を洗つてからA手術臺の方に來る。

祖母らしい婦人、叮嚀に會釋する。

老紳士は綿を咬へたまゝ、仰向けに口をあんぐり開いて、じつとしてゐる。

ドクトル（男の兒に近づき）何處がお悪いですか。

祖母らしい婦人 あのうち、此處の（と、自分の左の顎をさす）奥齒でございますが、もう長いこと齧齒になつてをりまして、それが時々痛みますのでございます。

ドクトル はあ、……今もお痛みになりますか。

祖母らしい婦人 はい、よい鹽梅に暫く起りませんでしたが、今朝程から又、……

ドクトル はあ、はあ、……

手術臺のペダルを踏んで仰向けにする。齒鏡を男の兒の口腔へ挿し込む。

ドクトル もつと口をあゝんと、……あゝんと開いて、……

エキスプロアラで奥齒を探る。男の兒體をモヂ／＼させる。

ドクトル 此處ですか、痛いのは？

男の兒、突然飛び上るやうな恰好をする。ドクトル慌てゝ手を引つ込める。男の兒バタ／＼暴れながら泣き出す。

男の兒 痛い！……痛いよう！

祖母らしい婦人 これ、これ、そんなことを云ふではありません。見て頂けば直ぐに痛いのが止まるんです。

男の兒 いやだア！ いやだア！

祖母らしい婦人 まあ、ほんたうに、何と云ふ分らず屋でせう。先生はちつとも痛くないやうに、上手に直して下さるんですから、………ほんのちよつとの間だから、我慢をしなければいけません。ね、ほら御覽、まアあの兒は意氣地なしだつて、皆さんが笑つていらつしやるよ。いゝえ、此の兒は決して意氣地なしではございません、唯今直ぐに御診察をして頂きます。——

ドクトル さあ、もう一度あゝんと開いて。——痛い所へは觸らんです。

男の兒火のつくやうに泣く。ドクトル迷惑さうに顔をしかめる。

祖母らしい婦人 これ、そんな大きな聲を出して、皆さんに御迷惑ぢやありませんか！——さ、いゝ兒だからじつとしておいで。ね、ほんのちよつとの間ですよ、お前が「痛いツ」と思ふうちには、いつの間にか濟んでしまふですよ。さ、おばあさんは眼を潰つてゐます。——もう直ぐ大人しくなりますよ。——ほんたうにお伶俐さんなんですもの。——

ドクトル強ひて手術をしようとする、男の兒いよゝ頑強に喚き立てる。

男の兒 いやア！ いやア！………

祖母らしい婦人 ではどうすると云ふんです！ おばあさんが困るぢやありませんか。

男の兒 いやだア！ 歸るんだア！

祖母らしい婦人 いゝえ、いけません、ちゃんと療治をして頂いてから歸るんです。

男の兒 いや、いや、いやア！ 歸るウ！………

祖母らしい婦人 そんなことを云つたら、いつ迄立つてもその齒が直りやしませんよ。家へ歸つてから又「痛い／＼」ツて泣いたつて、もうお婆、あさんは知りませんよ。いつそ一と思ひに直して頂いたら、いくら樂だか知れないぢやないか。——（ドクトルに）どうも何とも、……療治を受けますのが誠に嫌ひでございまして、いつも此の通りなのでございます。如何でございませう、泣きましても構ひませんのですが、無理にでもやつて頂きます譯には？——

ドクトル さあ、斯うお動きになられてはしにくいですな、——（男の兒に）どうですか、ちよつと靜かにしてゐて御覽。あゝんと、あゝんと開いて。さう、さう、賢いですな。何も痛いことはないです。

ドクトル辛うじてエキスプロアラを口腔へ入れる。とたんに男の兒再び飛び上るやうな恰好をして、悲鳴を擧げる。ドクトル、看護婦A Bにそれと眼くばせする。二人の看護婦、兵卒の如くツカ／＼と左右より進み、Aはシツカリ男の兒の頭を押さへ、Bは左の腕を掴む。男の兒の泣き聲いよ／＼昂じて、死物狂ひに兩足をもがき、首を動かし、一生懸命に抵抗する。

ドクトル（はつと溜息をして手を引つ込める）お氣の毒ですが、これでは奈何いかんとも仕様がないます。

看護婦A B、ドクトルが止めると同時に自分たちも手を放し、又ツカ／＼と元の席へ歩み去る。

男の兒は以下退場するまで一刻も休まず泣き続ける。

男の兒 歸るウ！ 歸るんだよう！……

祖母らしい婦人 ぢやあ何とでも勝手におし、その代りもう痛いと言つても知りませんよ。いゝかね、それでもない／＼と云ふのかね。

男の兒 歸るんだア、……

祖母らしい婦人 歸ると云ふなら歸りますから、もう泣かないでもよござんす。ほんとにまあ、手も付けられない、何と云ふ意氣地なしなんだらう。御覽、お前の弱虫には先生も呆れていらつしやるから。お、あ、さんもう懲りくしました。(ドクトルに) ではあの、誠に勝手ですが、いづれ又出直しまして、…………お忙しいところを何とも申譯もございません。

ドクトル いゝや。

手術臺を縦に直し、患者に被せた白い布を取り除ける。

男の兒臺から下りる。

ドクトルはさつさと手を洗つて、B手術臺の老紳士の方へ取りかゝる。

祖母らしい婦人 (男の兒を連れて待合室の方へ行く) どうも皆さん、おやかましうございました。ほんたうに飛んだ失禮を。…………これ、もう泣くんぢやありません！ 泣くんぢやないツたら！

叱言を云ひく、帽子掛けの臺からバラソルと帽子を取り、男の兒の手を引いてBドアより退場。

看護婦 B (診察券の名前を呼ぶ) 中村さん、中村さん。

會社員風の男 はあ。

看護婦 B (上手を指す) あちらへおいで下さい。

會社員風の男、診察室に入り、B手術臺の後ろを通つて上手へ行き、A手術臺に就く。

看護婦 A、彼に白い布を被せる。

會社員風の男は馴れてゐるらしく、含嗽をし、仰向きになつて、自分の番を待つてゐる。

ドクトル、老紳士の口より脱脂綿を去り、ブローチで齒の根を掃除する。

長い間舞臺沈黙。

青年、Bドアより待合室に入り来る。二十六七歳。貧乏な洋畫家らしい服裝。陰鬱な表情。瘦せて、青白い血色をしてゐる。受付のデスクへ行つて看護婦Bに診察券を渡し、待合室の下手の長椅子に腰かけ、帽子を膝の上に載せる。彼の視線は、自然テーブルの斜め向ひ側にゐる丁稚の顔、——その氣味悪く脹れた頬ツべたに注がれる。青年、惱ましげな瞳を擧げて、時々ジロ／＼とそれを見守る。

ドクトル
オキシパーラ。

看護婦A、オキシパーラの壘を持つて来る。

ドクトル、オキシパーラで老紳士の齒を消毒する。

ドクトル
アマルガム。

看護婦A、アマルガムを入れた乳鉢を持つて来る。

ドクトル、アマルガムを老紳士の齒に填充する。

ドクトル
(填充を終つて) 今日一日だけ、此の齒をお使ひにならんやうに。

老紳士
はーあ。

ドクトル
では明日^{みょうにち}——

老紳士
いや、お世話様でした。

B手術臺を下り、受付のデスクで書付と診察券を貰ひ、待合室の帽子掛けからバナマの中折とステツキを取り、Bドアより退場。

ドクトル手を洗ひ始める。

看護婦B
(診察券を読む) 小池さん、小池さん。

丁稚 はあ。

頬ツペたをおさへながらの、つそり立ち上り、診察室へ這入つてぼんやりとイむ。

看護婦 B (B手術臺を指す) それへお掛け下さい。

丁稚、B手術臺に掛ける。

待合室の青年、丁稚の頬ツペたを眼で追つてゐる。

ドクトルはA手術臺に来て、齒鏡を會社員風の男の口腔に挿し込む。

短き沈黙。

會社員風の男 (口に物が這入つてゐるので、聞き取りにくい聲を出す) いかゞでせう、矢張り抜いた方がよろしいでせうか。

ドクトル えゝ、此の二本だけ犠牲にした方が、……………

會社員風の男 あゝ、二本だけ、……………

ドクトル 此の齒と此の齒と、……………

會社員風の男 あゝ。

ドクトル (齒鏡を取り除ける) どうですか、拔^は齒してもよろしいですか。

會社員風の男 (今度はハッキリした聲で) 構ひません、やつて頂きたいですが、今直ぐ抜いて頂けませうか。

ドクトル 承知しました。

會社員風の男 二本一度に抜いて頂きたいですが、……………忙しい體だもんですから、時間を省きたいんで

すが、……少し痛くても構ひません。

ドクトル 承知しました。

短き間。傳達麻酔の準備。

ドクトル ノボカイン。

看護婦A、ノボカインの壘を持つて来る。

ドクトル、ノボカインを患者の局部に注射する。手を洗つてB手術臺の丁稚の方へ行く。
會社員風の男はじつとしてゐる。

ドクトル 含嗽をして。

丁稚含嗽をする。それから仰向けにさせられる。

ドクトル、メスを丁稚の口腔へ入れ、脹れた頬ツペたを内側より切る。

ドクトル もう一つ含嗽をして。

丁稚起き上つて含嗽をする。血膿がだく／＼と口から流れる。

待合室の青年、はつとしたやうに右の手で顔を掩ふ。手先が微かにふるへてゐる。

ドクトル、脱脂綿を丁稚に咬へさせる、手を洗つてA手術臺に行き、エキスプロアラで會社員風の男の奥齒を押す。

ドクトル 如何です、まだ幾らか感じますか。

會社員風の男 感じません。

ドクトル、鉗子を以て迅速にテキバキと二本の齒を抜く。ガリ、ガリ、と云ふ音がする。會社員風の男、やゝ青褪めた顔色になる。唇から紅い血のすぢが、糸を曳いて頤へ傳はる。

待合室の青年、再び手を以て顔を掩ふ。

ドクトル　どうか含嗽を。

會社員風の男含嗽をする。カチ／＼と齒を噛んで見る。

ドクトル　今日は一日アルコール分をお取りにならんやうに。

會社員風の男　はあ。それからあの、序に少し齒石を取つて頂きたいですが。

ドクトル　(ちよつと待合室の方を見て) あゝ、さう、では暫くお待ちを。

手を洗つてB手術臺に來、瓦斯パイプに火を點じ、プラスチック・インストルメントで丁稚の左の奥齒のゴムを抉り取る。

此の間極めて長き沈黙。

Bドアより令嬢が這入つて來る。十八九歳。端正な鼻。涼しい瞳。柔和で氣品のある圓顔。つゝましやかな内氣な態度。派手なバラソルと銀鎖製の手提げを持つてゐる。色が非常に白いのでその口紅が燃えるやうに際立つ。髪はつや／＼しい漆黒であるが、やゝ薄い方で、濡れた絹のやうに頭の鉢へ密着してゐる。黒っぽい明石の單衣の上から、胸部と臀部の肉づきが窺はれる。帽子掛けの臺にバラソルを置き、受付のデスクへ青い色をした特別診察券を出し、待合室の正面窓際の長椅子にかけ、ハンケチを出して輕やかに汗をたゝきながら、香水の匂を嗅ぐ。小さな白金のダイヤの指環が光つてゐる。

青年の眼は此の時から令嬢に注がれる。

令嬢は俯向いてゐるけれども、青年の凝視を感じてゐるらしく、時々着物の裾を直し、襟を氣にする。

ドクトル、ゴムを除き、ハンドピースにドリルを附け、コントローラーをキツクする。エンザンが鳴り出す。舞臺全く靜肅。エンザンと煽風器の響きが午睡を誘ふやうな感じ。

看護婦Aは上手に直立し、ドクトルの仕事を視詰めてゐる。

看護婦Bは受付のデスクに倚り、何か日誌へ書き入れをしてゐる。